

論題 中世における聖書解釈

—その原理をめぐって—

司会 慶應義塾大学 中川純男

提題：トマス哲学と聖書

広島大学 水田英実

提題：エックハルト問題

同志社大学 中山善樹

(於 国際基督教大学 1998.11.15)

司会

中川純男

「中世における聖書解釈」というテーマのもとで行われるシンポジウムは、第一回「『創世記』をめぐって」、第二回「ギリシア教父」に続き三度目となる。このテーマでの最終回となる今回は、聖書解釈の原理は何かという問題に焦点を絞った提題をお願いした。トマスとエックハルトという、年代的にはきわめて近いにもかかわらず、異質と見なされているこの二人の思想家の聖書解釈の方法には、じつはいくつかの共通点と連続性のあることが提題者の発表により明らかになったように思う。

提題により明らかになったと思われる点を簡単に振り返っておこう。水田氏の提題の基調は、トマス哲学そのものが聖書解釈であるという主張にある。これは氏が指摘されたように、『神学大全』冒頭に述べられている「聖なる教え」の構想に他ならない。したがって、聖書の解釈 *intelligere* の原理的可能性は聖書が神の知の啓示であることに求められる。しかしながら、神の知を表しているということは聖書に固有のことではないとも考えられる。神の知は世界創造の知であるとするなら、世界についておよそ真であるかぎりの知はすべて、何らかの仕方では神の知を表していると考えられるからである。聖書を通して与えられる知に独自性があるとすれば、それは聖書の

啓示が救済のために必要な知を与える点にあると言わなければならない。したがって「聖なる教え」はキリスト論をその中心とする知であることになる。聖書解釈がたんなる世界理解、人間理解にとどまらないとすれば、それはキリスト論を目的とする世界理解であり人間理解であることによると言えよう。このような「聖なる教え」は、「アリストテレス哲学」をも取り込むことができる。しかし、それは必ずしもアリストテレスの意図に沿ってアリストテレス哲学を取り込むことではない。この意味で「聖なる教え」におけるアリストテレス解釈は、たんなるアリストテレス理解ではない。

中山氏の提題に示されたエックハルトの聖書解釈は、まさにこのキリスト論からはじまる。「われわれの靈魂を刺激する」解釈を意図していると語るエックハルトは、自らの聖書解釈の動機が実存的 (spiritualis) であることを明言しているように思われる。キリスト論を語ることは歴史的な出来事をたんに過去のこととして語ることではない。その出来事のわれわれにとって持つ意味を明らかにすることである。とすれば、そのための聖書解釈は、中山氏が指摘されたとおり、歴史的な出来事の、われわれの魂における何らかの再現を語ることでなければならない。この意味でエックハルトの聖書解釈は、しばしば指摘されるように歴史性を消去しているのではなく、むしろ歴史性を回復していると言わなければならないであろう。注意すべきはそのようにキリストの出来事の魂における再現を語ろうとする「哲学的理性」は、トマスが自然的と呼んだ「アリストテレス哲学」の理性ではないという点である。それはトマスの「聖なる教え」を導いている理性、信仰箇条を原理とする理性に他ならない。

会場では多くの方の参加をえて、活発な質疑応答があったが、今回はそのいくつかを本報告に収録するという形をとらず、提題者の判断で重要と思われる意見ないし指摘にかんしてのコメントを、提題報告に含めていただくことにした。
